

「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

赤十字

4

APRIL 2020 NO.959

NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS
<http://www.jrc.or.jp>

令和2年4月1日(毎月1日発行)
赤十字新聞 第959号
昭和24年9月30日 第三種郵便物認可



わたしも赤十字 赤十字活動の支援者

中村洋子 (なかむら・ようこ) さん【p.5でご紹介】

特集

◎コロナウイルスへの恐れが第二、第三の感染を引き起こす

社会を分断する「不安」の感染

人間を救うのは、人間だ。



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3 TEL: 03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

 **日本赤十字社**
Japanese Red Cross Society

社会を分断する「不安」の感染

新型コロナウイルス(COVID-19)の国内での感染1例目が確認されてから約3カ月。未知のウイルスの脅威は私たちの日常を変えました。そして今、第二・第三の感染…「不安と偏見」が世界中に広がっています。

●あなたの周囲で、こんな光景はありませんか？



- 地域や民族特性を病気のレッテルにする
- 感染の可能性のある人に敵意を向ける
- 犯罪者扱いしたり侮辱するような言葉を使う
- 定かではない情報、うわさを広める

まるで第二・第三の「感染」



私たちの社会に、何が起きているのか

トイレットペーパー、さらにはオムツが、店頭から消えた。…マスク不足から端を発し、誤った情報が拡散され、紙製品の買い占めが行われた結果です。このように、「不安」をきっかけに自己防衛本能が働き、人々が利己的な買い占めに走る現象は、これまで大きな災害の度に起きていました。しかし今回、

それとは別の社会現象が表れました。日本で生活している外国人留学生の体験談です。留学生数人が飲食店で食事をしていて、離れた席の客たちがこちらをにらみ、ヒソヒソ話。怖くて母国語で会話できない…。外国人に対してだけでなく、同じ日本人同士でも問題が起きています。「咳エチ

ケット」を巡って殴り合いのケンカが起きたり、花粉症のためマスクをしてクシャミをする人が白い目で見られたり、かつてない過剰な反応が至るところで発生しています。…未知のウイルスから「不安」が生まれ、その不安が社会全体に広まって「偏見・差別」となる。まるで、第二、第三の「感染」です。

コラム 医療者たちの苦悩

「パンデミック」その時、医療者は…

2014年のエボラウイルス流行時、海外では、いったんは医療支援に参加を表明した医療者の75%が、その後、家族や親類の反対で辞退しました。感染者対応業務が終わり、危険はほとんどないことを頭では理解していても、子ども

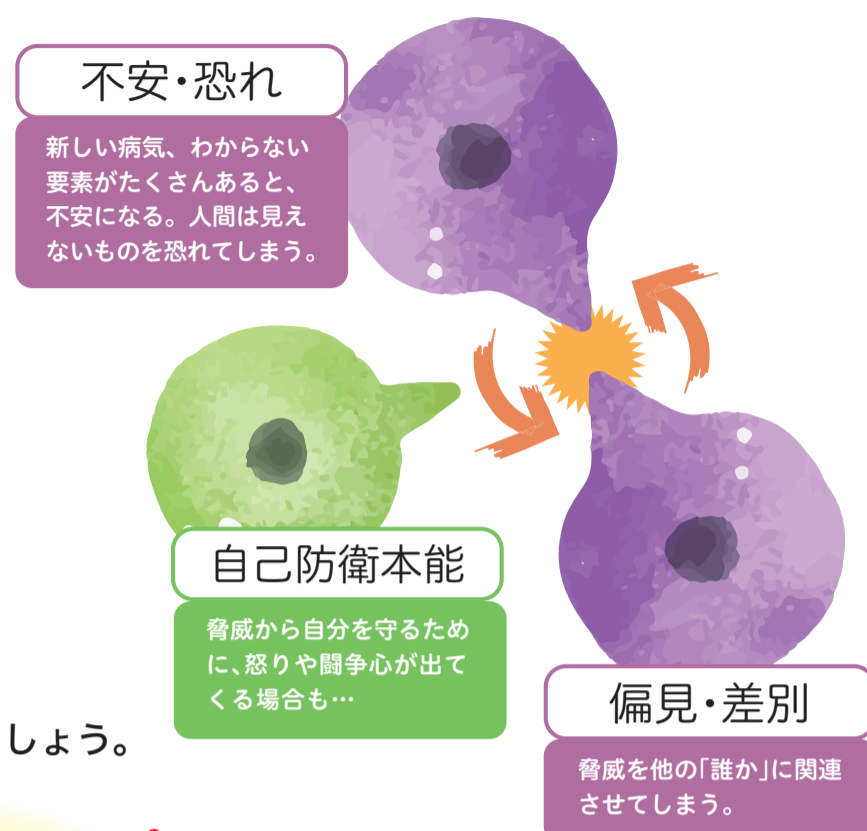
や高齢者の家族に感染することを恐れてしばらく自宅に戻れないことは珍しくありません。また、夫婦などの場合、「仕事(医療者としての使命)」と「家族の安全」のどちらを優先させるのかと、深刻な信頼のギャップが生まれることもあ

ります。感染症対応にあたる日赤の医師・看護師・医療事務者も、このような葛藤を抱え、周囲の「偏見・恐れ」に悩まされながらも、苦しんでいる人を救うという使命感を支えに、業務を遂行しています。

なぜ、偏見や差別は生まれるの？

【不安と偏見のサイクル】

全ては「未知のもの」に対する不安・恐れから始まります。新型コロナウイルスは、一般的な感染対策を徹底して行うことで感染に対する防護力は高まり、万が一感染したとしても、ほとんどの方が軽症で回復します。しかし、新しい病気で不明な要素が多いため、そして何よりも「敵(ウイルス)」が見えないため、どうしても不安が高まります。不安はストレスになり、自己防衛本能が働き、自分の心と体を守ろうとして…見えない敵の代わりに他の「誰か」を排除すべき存在と認識する。こうして「偏見・差別」が生まれてしまうのです。さらに偏見は他の不安要素を引き寄せる可能性もあります。この悪循環を断ち切るには、まずは「脅威の正体」を見極めて不安に乗っ取られないように対処することが重要です。



「不安」から心を守る5つの方法

落ち着きを取り戻すために、次のような方法を試してみましょう。

- 1 まずはリラックス ほんとする時間を作ろう
- 2 熱中できたり心が晴れる活動に時間をさく。運動も効果的！
- 3 この「騒ぎ」から一步引いて、別の視点を持つ人と話してみる
- 4 「その情報は正しい？」冷静に情報の信頼性を考えよう
- 5 食べて(健康的な食事)、寝て(質の良い睡眠)、自分をいたわろう

つい陥ってしまいがちな「不安」の感染に気づき、セルフケアに努めましょう

病気を恐れる心が偏見や差別を生み出し、ウイルスの封じ込めを困難にしてしまう。

命を脅かすものを恐れる。これはどんな動物にも備わっている本能であり、本来恐怖心は生存の確率を高めてくれる良いもののはずです。しかし、新型コロナウイルスの発生以降「正しく恐れる」ことがとても難しくなっているように見えます。なぜ、難しいのでしょうか？人間の脳は、見えない対象を恐れることがとても苦手です。脅威を明確に認識するためには、見える「対象」が必要なのです。見える対象を遠ざけることでかき消す安心感が得られますから、安心して嫌悪すべき対象を無意識的に探します。これが今回、ウイルスを連想させる「人種」「地域」「職種」「人」などが嫌悪の対象となり、偏見・差別が生まれているメカニズムなのです。

「病気を恐れる心が生み出す偏見や差別」。これは、さらに2つの弊害をもたらす危険性もあります。1つ目の弊害は、偏見や差別が広がると、自分が非難、差別されることを恐れ、必要な相談・検査を受けることをためらってしまうこと。結果として、感染拡大を助長してしまう可能性があります。2つ目の弊害は、医療者の疲弊です。検査や治療など、最前線で感染者への対応に忙殺されている全国の医療者。しかし現在、こうした保健医療機関のほとんどが、風評被害や嫌がらせを恐れて神経をすり減らしています。未知の感染症との戦いは長期戦で「最前線でウイルスに対応し続ける医療従事者が倒れたらもうおしまい」。これがSARSやエボラ対応から人類が得てきた教訓です。彼らを忌避や

攻撃の対象として扱うのではなく、むしろ応援し支えるべき対象である社会全体で声を出すことも早期解決につながります。「正しく恐れる」のは難しいものですが、過度に恐れすぎると気づかぬうちに犯人探しや攻撃に加担していることもあるかもしれません。まずはご自分と家族の感染予防を徹底しつつ深呼吸！こんなときだからこそ身近な人と支え合うことから始めてみませんか。



諏訪赤十字病院 臨床心理士 国際赤十字・赤新月社連盟心理社会センター 登録専門家 森光玲雄

令和2年度 日本赤十字社の予算概要

「苦しんでいる人を救いたい」という理念の下、日本赤十字社は災害救護活動や国際救援活動をはじめとして、さまざまな事業を展開しています。これらの事業の財源は、それぞれの事業によって異なり、会費や寄付金を財源とする「一般会計」と各事業での収益を財源とする「特別会計」があります。



一般会計

全国の個人・法人の会費および寄付金などを主な財源とし、国際活動、災害救護、救急法などの講習会、青少年赤十字やボランティアの活動など、本社・支部の事業にかかる歳入歳出予算をまとめたものです。

苦しんでいる人びとを救うための費用

海外での救援・開発協力活動のために

33億123万3千円
国際救援、開発協力の費用



国内の災害救護活動のために

26億6019万6千円
救援物資の整備・備蓄等の費用
(災害救護事業費)

東日本大震災復興支援のために

3億9233万6千円



「守る」を広める活動のために

35億7418万9千円

救急法等の講習会、奉仕団・青少年赤十字活動普及の費用



地域のボランティア活動支援のために

21億337万6千円

地区・分区への事業費・事務費の交付金



赤十字施設の設備投資のために

47億9781万2千円

災害救護設備や救急医療体制の整備などの費用、建物の整備、資産の維持管理などの費用、支部、病院、血液センター、社会福祉施設の基盤整備の費用など

翌年度以降の継続事業のために

14億8323万円

災害救護活動、国際救護活動等の翌年度以降の実施に備えた積立金

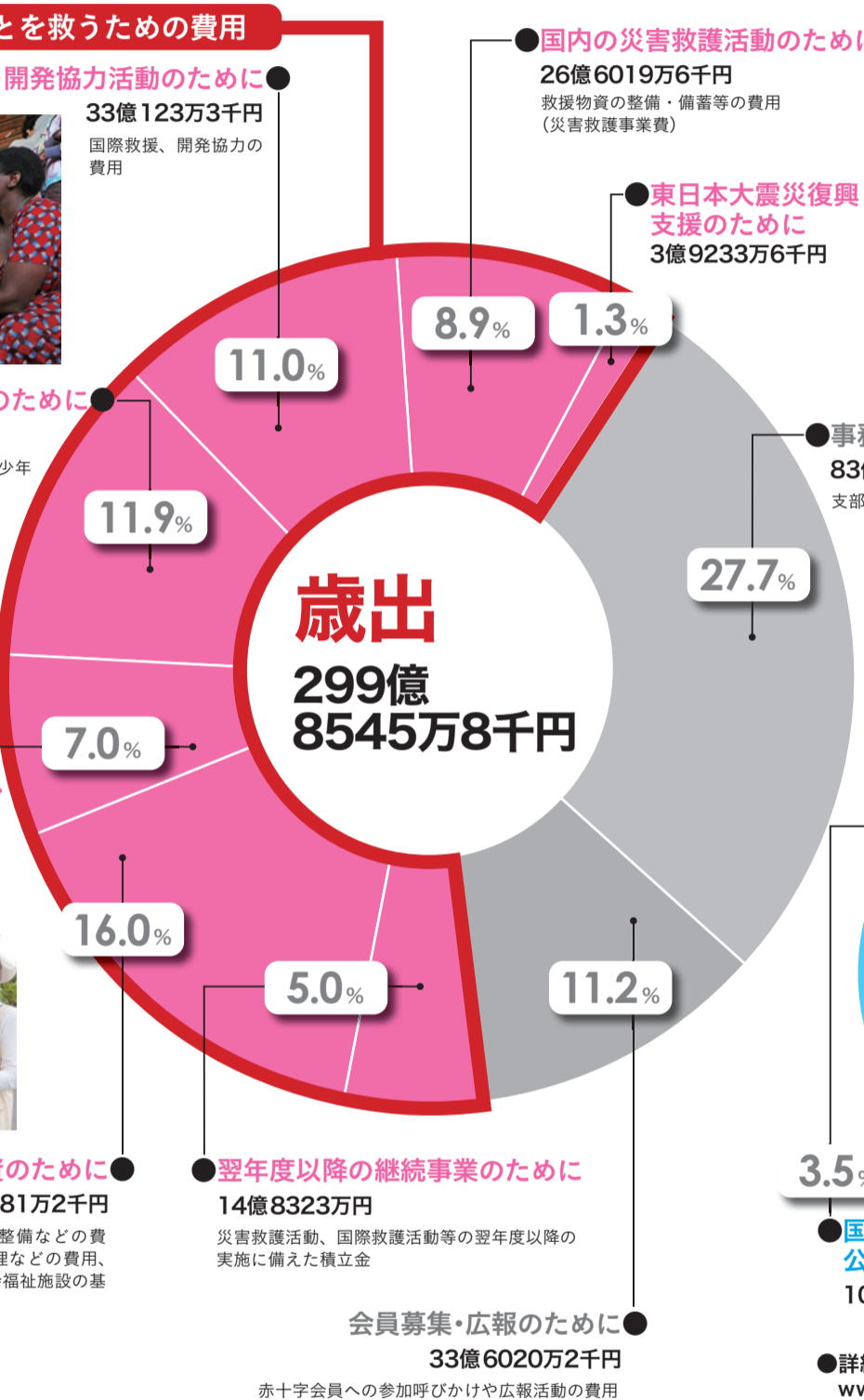
会員募集・広報のために

33億6020万2千円

赤十字会員への参加呼びかけや広報活動の費用

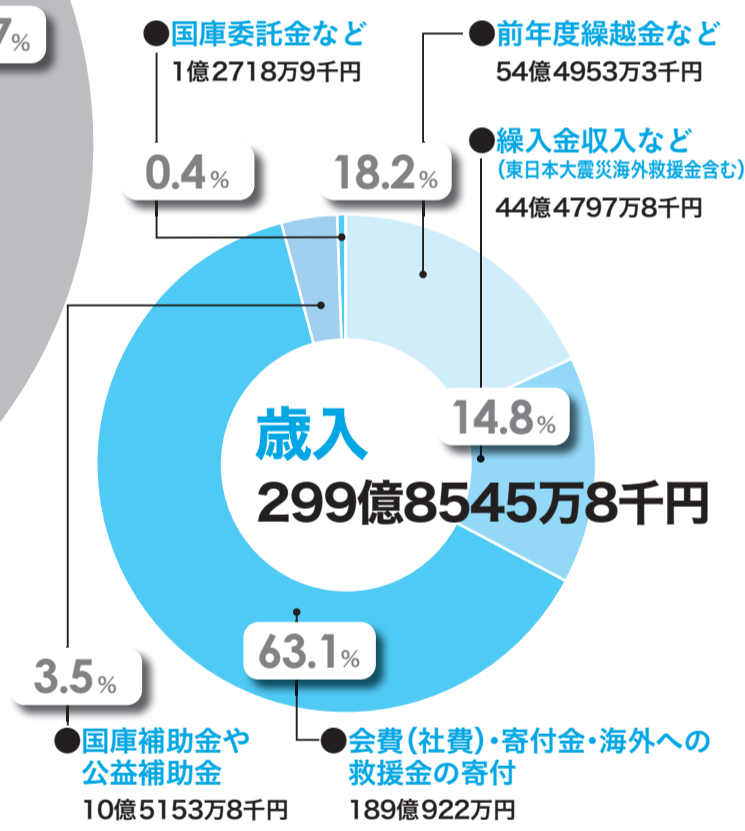
歳出

299億8545万8千円



歳入

299億8545万8千円

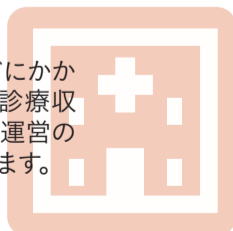


●詳細は日本赤十字社ホームページでご確認ください。
www.jrc.or.jp/about/plan/

特別会計

医療施設

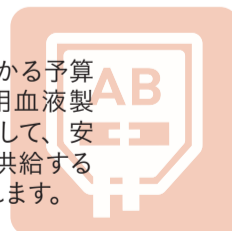
赤十字医療施設の運営などにかかる予算をまとめたもので、診療収益を主な財源として、病院運営のための費用などに充てられます。



■収入 1兆1245億3303万円
■支出 1兆1311億6328万4千円
■差引額 -66億3025万4千円

血液事業

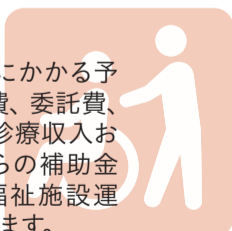
血液事業の運営などにかかる予算をまとめたもので、輸血用血液製剤供給収益を主な財源として、安全な血液製剤を安定的に供給するための費用などに充てられます。



■収入 1639億1902万1千円
■支出 1607億1246万5千円
■差引額 32億655万6千円

社会福祉施設

社会福祉施設の運営などにかかる予算をまとめたもので、措置費、委託費、介護保険、自立支援費、診療収入および都道府県・市町村からの補助金を主な財源として、社会福祉施設運営のための費用に充てられます。



■歳入 195億4385万5千円
■歳出 153億7002万1千円
■差引額 41億7383万4千円

注) 1. 「一般会計」の各合計額には、本社・支部・施設間の内部取引額を含んでいます 2. 「一般会計」の東日本大震災義援金にかかる歳入歳出予算は、含まれていません
3. 「特別会計」における収入とは「収益的収入」、支出とは「収益的支出」、差引額とは「収益的収入支出差引額」のことで

3.11 あれから 10年を生きて

第1回

東日本大震災の発生から2021年3月で10年。来年の3月号まで「3.11」から人生を変えた人々の物語を毎月連載します。

あなたに見せたかった…「福島と生きる私」

福島県双葉郡富岡町(発災当時) たなかみなこ 田中美奈子さん

「福島から届いたヒマワリの種が、見事に花を咲かせましたよ!」

そう言って、ヒマワリの切り花を掲げて見せたのは、君津市赤十字奉仕団の鎌田和子委員長、あなたでした。2011年9月上旬、避難先の千葉県の君津市で、毎月開催される地域住民と震災避難者の交流会でのことです。そのヒマワリの種は、6月ごろに福島の知人から私に届き、鎌田委員長にお渡ししたものです。赤十字奉仕団の皆さんは、毎回、東北の被災地に縁のあるものや、東北の郷土料理を用意して、楽しませていただきました。

鮮やかな黄色の花束を見て、私は鎌田委員長に声を掛けずにいられて喜んでました。

「鎌田さん。私、田中と申します。これからもよろしく願いいたします」

私が名乗ったのは、実はその時が初めて。鎌田委員長は驚いた様子もなく、満面の笑みで、「田中さん。こちらこそ、よろしく願いますね」。

交流会では、名前を聞かれることはありませんでした。それは、最初に鎌田委員長が決めたルールだったそうですね。『福島の皆さんのお気持ちにご負担がないように、先方から名乗りがあるまで、名前を聞かずに楽しんでもらいましょう』。なんとという気遣いでしょう。鎌田委員長や赤十字奉仕団の皆さんのおもてなしには『主役は避難者の皆さん、私たちは裏方』という徹底したホスピタリティー精神があふれていました。

3月11日の地震・津波発生後、私たち家族9人は福島県双葉郡富岡町から、着の身着のまま逃げました。津波が町を襲い、まずは避難所へ逃げ、その翌日には福島第一原発の事故で、さらに隣町へ。そして千葉県の君津市にたどり着いたのは3月18日の午前零時。私たちは何もかもを失ったけれど、君

津の人々の優しさ、赤十字奉仕団の方たちとの交流のおかげで、少しずつ傷が癒えました。10カ月後、私たちは家族の仕事の都合で福島のいわき市に移り住みましたが、もっと長く君津で暮らしたかったです。

鎌田委員長の訃報は、あまりに突然でした。いわき市に移ってからも連絡を取り合い、2012年5月には被災地を巡った鎌田委員長、奉仕団の方々と、いわきでランチをすることもできました。まさかそれから1カ月後に、急逝されるなんて。福島から駆け付けた葬儀、最期のお別れで「たくさん人のために尽くされて、お疲れ様でした」と声を掛けたら、鎌田委員長はいつも通りの穏やかな顔で、ほほ笑んでくださったようで…。

鎌田委員長。あれから私は、福島で語り部を始めました。「富岡3.11を語る会」というNPOの活動で、さまざまな場所に出かけて行き、東日本大震災での経験を伝えています。お話の中で、君津で体験したことも話します。あの不安な日々、避難先の見知らぬ土地で、押しつけではない真の思いやりで寄り添ってくれた方たちがいたこと、それがどれだけ私や私の家族に支えになったか…。鎌田委員長に、語り部活動の様子をお見せしたかったです。



君津での最後の交流会。花束を受け取る鎌田委員長(右)と、お礼の言葉をのべる田中さん(左)

わたしも赤十字

今月の表紙

赤十字には「寄付」という形で赤十字の活動に参加する支援者がいます。全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にをご紹介します。



赤十字活動の支援者

中村洋子 (なかむら・ようこ) さん
埼玉県所沢市/50歳/会社員

“変わらない”から赤十字がいいんです

普段はIT系の会社で、PCと向き合う日々ですが、住んでいる町では町内会の役員としてたくさんの人と交流しています。この町に暮らして25年、PTA活動をきっかけに町内会と関わるようになり、町内会の活動がいかに安心安全な町の暮らしを支えているかを知りました。「災害訓練の実施(毎年)」「独居老人宅の見回り」「町内の街灯を増設(町内会費で)」など、幅広い活動に驚き、「ありがたい」とさえ感じました。町内会という支え合えるコミュニティは私の誇りです。

赤十字への寄付は、18年以上、続けています。災害が起こったときの義援金だけでなく、毎年

行っているのは赤十字の活動資金に対してです。私は寄付という形で、思いを託しています。

確実に活動をしてくれる、という安心感があるから赤十字に託そうと思える。赤十字のように「変わらずに存在してくれること」って、実はとても大切なこと。いざというときにすぐに助けに来てくれる存在であってほしいから、何も起こらなくても毎年寄付をします。ふだんから余裕がないと、大変なことが起きたときに力を発揮できませんからね。「いつも通り、そこに居てもらうために、寄付する」。そういうゆとりが、大切なんだろうな、と考えています。

寄付するあなたも 赤十字です

日本赤十字社へのご寄付の方法

クレジットカードで寄付



Webサイトからの登録により、クレジットカードでご寄付いただけます。ご寄付の方法は、毎年・毎月・今回のみからお選びいただけます。

身近な窓口から寄付



- 郵便局・銀行の口座振替
- 郵便局・銀行の窓口
- お近くの日本赤十字社窓口

詳しくはこちら→



日本赤十字社 寄付 検索

www.jrc.or.jp/contribute/

WORLD NEWS

ネパール地震緊急救援・復興支援事業



ネパール地震から5年 現地の生活が大きく改善

2015年4月の発災直後から続けてきた、ネパール地震緊急救援・復興支援事業がまもなく終了します。これまでに現地で行われた支援事業の成果を現地から報告します。

生活に直結する復興支援で 被災地の人々に笑顔があふれていく

2015年4月25日にネパールで発生した地震はマグニチュード7.8を記録し、死者8,790人、被災者数560万人以上、国民の5人に1人が被災するという甚大な被害をもたらしました。日赤は地震発生直後の緊急救援に続きネパール赤十字社と協力しながら7分野の復興支援事業を行ってきました。その中でも特に住民の生活に直結しているのが、地震で損壊した住宅の再建、診療所の再建、給水設備の整備、生計の支援という4つの事業です。現地で復興支援に従事してきた日赤ネパール代表部・五十嵐和代首席代表は「耐震性のある家や新しい水くみ場、そして村々の診療所が完成しました。人々の生活は、震災前に比べてより良く安全になりつつあります」と被災地の現状を説明します。被災者一人一人と向き合う生計支援にも、日赤は力を

入れてきました。地震で仕事を失った被災者に向けて約4万円の義援金を給付し、新しい仕事に取り組む被災者には大工育成などの職業訓練も行ってきました。働く場所をなくした大工の男性は、義援金を使って自ら工場を再建。彼の新しい工場で作られた家具は、地震で家財道具を失った方の助けにもつながりました。また、義援金を元手として小さな雑貨店を開いた女性は、地震で子どもを失うというつらい経験を乗り越え、新しい生活を始めています。

子どもたちは未来への希望 広がる住民同士の支え合い

学校の再建も大きな事業の1つです。再建中のダデューワ小学校校長ビジャヤ・タマンさんは語ります。「村の住民も子どもたちも、校舎の完成をととても楽しみにしています。先日も約100世帯の村人が集まって、どうしたら子どもたちが安全に学ぶことができるのかを話し

5年間の支援の歩み

緊急救援

医療支援
物資支援

復興支援

地域保健再建

診療所14棟

生計支援

義援金413世帯
職業訓練36人

血液事業

血液センターへ
資機材114台

住宅再建

1,652世帯

水と衛生

給水設備20カ所

学校基盤防災

小学校1校建設

組織能力強化

ネパール人の職員研修
約350人



日赤の支援を受けて住宅を再建したタマンさん夫妻(2020年2月撮影)

合いました」。この学校で学ぶ子どもたちが、この地域の新しい未来を作っていきます。支援を受けた被災者が日常生活を取り戻し、彼らが周囲の被災者や地域の支えになっていく。そんな世代を超えた住民同士の支え合いが生まれているのです。日赤がネパール赤十字社とともに実施してきた復興支援事業はまもなく終了しますが、少しずつ、そして着実に、被災者は穏やかな日常を取り戻しています。



新しい小学校の完成を心待ちにしている子どもたち

数字で見えた!

世界で生かされる皆さまのご支援

世界中の災害や紛争から、人々の命と健康を守る日赤の国際活動。皆さまの寄付がどのように世界で役立てられているのかを、数字でわかりやすくお伝えします。

708 人



新しい診療所で生まれた赤ちゃんとお母さんたち

新しい診療所が完成

ネパール地震の被災者のために、日赤にはこれまで皆さまから20億円ものあたたかなご支援が寄せられました。皆さまのご支援でできたことの1つが、診療所の再建です。首都カトマンズから被災地までは、山の中のデコポコ道を車で約5時間。大雨が降ると道路がぬかるみ、資機材や人を運ぶトラックが通れなくなります。困難な環境の中、日赤は支援を続け、被災地に14棟の診療所を完成させました。診療所の利用者は、2020年3月現在、92258人。病気やけがの治療だけでなく出産のための利用も多く、**708人の新しい命がこれらの診療所で誕生しています。**

日本にいる皆さまから、世界の人々へ。そして、未来の子どもたちへ。皆さまのご支援は、世界と未来につながっているのです。